

3. キャリア教育の構想

— 普通科・普通科型総合学科の実践例から —

教育発達科学研究科教授 寺田盛紀

はじめに

1. キャリア教育の概念
2. なぜキャリア教育か
3. キャリア教育の取り組みの諸形態
4. 選択型キャリアパスウェイ：普通科型総合学科のキャリア教育：系列
5. 普通科総合選択制高校のキャリア教育：総合学習としての「課題研究」
6. 普通科・HR進路指導型キャリア教育の実践：体験学習の重視
7. 重要な問題

はじめに

キャリア教育について、出来るだけ具体的なこととお話するというのが与えられた課題です。そこで今回は、キャリア教育というものの基地、あるいは一番盛んなところの問題を中心として、キャリア教育の状況や私の考えの話をして、60分程、お付き合いを頂けたらと思います。サブタイトルには「普通科・普通科型総合学科の実践例から」という題目をつけさせていただきましたが、これは分かりやすく言いますと、総合学科とキャリア教育についての話ということになります。

まず、本題に入る前に、おことわりをしないといけない点があります。私はキャリア教育開発の研究委員を引き受けましたが、キャリア教育というものを附属学校が教育目標に立てた詳しい経緯や、あるいは、総合人間科に続いて特に高校段階において「ソーシャル・スキル」という科目が特設されましたけれども、その辺の詳しい狙いについても、十分には承知しておりません。また、私は心理学の専門家でもありません。その点をおことわりしたうえで、特に高等学校の段階を中心に考えてみたいと思います。

話の柱は全部で七つ立てました。1番目は、キャリア教育の概念についてです。これは金井先生の話とあまり重ならないように簡単に申し上げたいと思います。2番目は、なぜ今、キャリア教育が問われるのかについて考えてみようと思います。3番目に、具体的なキャリア教育の取り組みの諸形態を整理します。4番目は、それらのうちまず総合学科の場合について。5番目には総合選択制高校の場合について。そして6番目には、通常の普通科の場合についての話をして、それぞれの特徴的な部分を中心に紹介させていただきたいと思います。そして最後に、重要な諸課題をいくつか指摘したいと思います。

1. キャリア教育の概念

それでは最初にキャリア教育の概念について話を進めていきたいと思います。この問題を議論する時には必ずここから始めるのですが、直接的には1971年に、当時全米教育局長官であったマーランドが、ジュネーブの国際会議で、キャリア教育を提唱したことに始まります。そしてそこで、キャリア教育とは、若者に知的スキルと職業的あるいは職務的スキルの両方を伝える為に計画されたものであると位置付けられました。ここで重要なのは、キャリア教育というものが、従来の選職指導、つまり就職指導という意味に付け加えて、進路選択の為に知的スキルの教育と職業的スキルの両方の教育を合わせて施すといった比較的広い意味合いを持つようになったことです。

その後、1970年代の中頃から80年代の初頭にかけて、このキャリア教育を推進するという事で、連邦の補助法（キャリア教育振興法）が成立します。その結果、アメリカではキャリア教育の運動が全米的に進められ、普及していきました。当時、なぜアメリカでキャリア教育が進められたのかといいますと、西ヨーロッパを含め欧米諸国で共通している若年失業・青年失業の問題や、アメリカは世界に先駆けて高い基準の教育制度を持っているにもかかわらず、非常にドロップアウトする生徒が多いといった問題が背景にあったからだと考えています。

そして、1981年にこのキャリア教育振興法がなくなって以来、キャリア教育という言葉はそう広く使われなくなりました。代わりに1994年以降、クリントン政権初期の頃から school to work opportunity act という言葉が盛んに使われるようになりました。これはももとは1970年代の中頃、キャリア教育が進められたのとちょうど同じ頃に、ヨーロッパの OECD レベルでやはり同じような問題を抱えていた国々が、学校教育の終わった後の問題をどうするかについて話し合ったことに始まります。その結果、学校教育と職場、あるいは高等教育機関などといったものを見こした、学校から職場・仕事へのスムーズな移行という取り組みが始まるのですが、アメリカでも94年にこのような行動を受け継いで、主に senior high school の普通高校でその取り組みが始まりました。

現在、アメリカでこの動きは展開中ですが、日本にもその影響は入ってきています。ですが日本について話す前に、まず、この school to work opportunity act とは何かを簡単に申し上げたいと思います。これは、学校教育から仕事へのスムーズな移行を進める為に、主として高等学校の段階、あるいは、一部では高等学校の段階と大学始めの2年間ぐらいの段階をつなげた時期に、普通教育や職業教育を統合した教育や、学校教育と地域事業所とのパートナーシップの教育をしていくことを推奨しています。具体的には、後でも説明しますが、ジョブ・シャドー、今回日本の学習指導要領にも入ってきましたインターンシップ、コープ教育などといったものです。そして、こういったもの全体を総称してキャリア教育と呼んでいると理解して頂いていいと思います。

それでは、日本ではどのような経路をたどったかということです。日本も OECD の加盟国であり、ユネスコにも積極的に参加して、先進国の国際的な動きの中で学校教育の改革を行ってきました。そして1977年、中学校・高等学校学習指導要領の改訂で、学校教育と有機的に結びつけるというねらいの下、勤労学習体験を取り入れ、school to work の取り組みを導入しようとした。しかし、全国的にこれは殆ど定着しないで失敗に終わりました。やがて、これが十分に展開しない

ということで、再び新しい動きが起こります。その大きなきっかけとなったのが、平成6年度に、キャリア教育の軸として、総合学科が新設されたことでした。このことにより、キャリア教育の基盤が確立したのです。総合学科のことにつきましては、昨年度、筑波坂戸の服部校長先生がおおいでになっていろいろ話されたと思いますが、筑波坂戸の場合は非常に特異な形態をとっていますので、総合学科を代表する例として取り上げるのは難しいのではないかと思います。

さらに平成11年度の中教審答申では、初等中等教育と高等教育との接続の改善について、という部分で、初めて言葉の上で、キャリア教育を推進していくということが書かれました。そこでは、キャリア教育とは、学校と社会及び学校間の円滑な接続を図る為のものとして位置付けられており、「望ましい職業観・勤労観の教育及び職業に関する知識や技能を身に付けさせると共に、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」であると定義されています。これを私なりに言い換えますと、キャリア教育とは、生徒の進路選択能力が衰退しているという現状の中、従来の職業観・労働観教育に付け加えて、専門的ではないにしても、幅広い職業知識や技能を習得させて、進路選択能力を養っていく為の教育なのではないかと思います。一言で言えば、キャリア教育とは、進路指導と職業教育の融合であると考えてよろしいのではないのでしょうか。

2. なぜキャリア教育か

では次に、なぜ、今キャリア教育が求められているのかについて話を進めていきたいと思います。いろいろな意味付けが可能だとは思いますが、主に四つにまとめることが出来ると思います。まず、多様な職業・職業形態がでてきたことが挙げられます。1995年頃、日経連はこれからの労働社会における人材の構想というものを提案しました。そこでは、従来からある日本的な終身雇用や年功制などといった制度が徐々に変化していき、非常に多様な職業形態がでてくることが予想されています。そしてここでは、三つの就業形態というものが提案されています。一つ目は、従来の年功制的かつ終身雇用的なシステムの中で、キャリアを形成していく形態です。ジェネラリストタイプと呼ぶことが出来るのではないのでしょうか。二つ目は、ジェネラリストタイプに対してスペシャリストタイプです。これは、それぞれの事業所・事業組織の中で、自分のスペシャリティというものに関してキャリアを形成していく形態のことをいいます。三つ目は、グローバル社会に対応した、非常にflexibleで柔軟性のある形態です。ここでは、柔軟な雇用をすることにより、様々な就業形態を経た人達を取り入れることをねらいとしています。最近では、だいたいの企業でもこれらいずれかの形態でキャリアを育成しております。しかし、様々な就業形態に伴って、いわゆるフリーターというものに対する位置付けが深刻化しています。フリーターというのは、本当は職業ではないのですが、普通に職業化している。新聞などを見ても、「職業：フリーター」と書いてあるという現実がある。こういった問題をどうするかといったことが、一つの課題になってくるのではないかと思います。

次に、経済状況の問題などもあるとは思いますが、既存の就職システムが崩壊し、初めて自分で進路選択を経験しなければならない時代になったことが挙げられます。みなさんもそうお感じになるとは思いますが、従来のように、名古屋大学とか附属ブランドで就職できる時代ではなくなってきました。つまり、レールに敷かれた就職システムが壊れてきたのです。そこで初めて、進路選択

能力そのものが問われるようになりました。

例えば、今、私は3人の大学4年生の女子学生を担当しているのですが、なかなか就職が決まりません。従来の先輩・後輩の関係でいってもなかなか決まらず、本当に悩み悩んでいました。そうこうしているうちに卒業間近になり、現在は卒業論文を作成しているという状態です。このことを通して、私は従来のシステムが崩壊とまではいかないにしても、やはり大きく揺らいでいて、その中で生徒・学生自身が自分で進路を決める体験をしなくてはならなくなった、あるいはそういうことが求められるようになったのだと感じざるを得ませんでした。

それから、高学歴化（大卒者）がユニバーサル化し、その「品質」表示機能が問われるようになったことが挙げられます。昨年度で、すでに専門学校を除く高等教育進学率が46%に達し、大学進学者がほぼ5割という状況になりました。その結果、人材を扱う側は、従来はどのような学部、学科あるいは大学、高校を出たかで、個人のおおよその可能性やその後のキャリア形成を見こせたのですが、それが分からなくなってしまいました。そこで、名古屋大学を出た後に、企業で何が出来るのか？を問うようになったのです。現在、とりわけ文系学部の学生の間では、臨床心理学などを専攻している人は別にして、相当にダブルスクール化現象が進んでいます。また、秘書検定や、既に基礎学力化していますが、TOEICなどの勉強を一生懸命にしています。つまり、厳密にはいろいろ問題がありますけれども、総じていえば、「資格」が求められる時代になったのです。このように、何が出来るのかを問われる時代になったので、大学・大学院も、ある意味では職業教育化しつつあるというのが現状です。

3. キャリア教育の取り組みの諸形態

では、次にこのような背景の中で、キャリア教育が現実にはどのような形で行われているかについて話をしていきたいと思いますが、主に五つに分類させていただきました。

一つ目は、アメリカンハイスクール型です。これは日本ではあまり見かけませんが、どの教科の中にもキャリア教育を入れていき、評価、課題、内容、方法すべてにおいて、学校全体がキャリア教育に取り組んでいくというやり方です。

二つ目は総合学科型です。総合学科の場合、アメリカンハイスクール型のように、それぞれの教科・科目の中でキャリア教育を取り入れるわけではないのですが、キャリア形成を促進する為に、全体として課程編成などといった形で、系列というものを設けています。例えば、進路にそった系列の中で、教科編成を行ったり、それとは別に、教育課程全体の基礎的な科目として、「産業社会の人間」や「課題研究」などといった、統合的なキャリア教育の科目を位置付けたりしています。

三つ目は、総合選択型です。これは総合学科型と似ているのですが、普通科の総合選択制高校の場合と、職業科・専門学科を多く持っている高校が、学科をクロスして授業を選択できる場合の二通りがあります。普通科総合選択制高校の場合、総合学科の系列的なものは学系や学群という形で科目編成されます。それ故、生徒はそれぞれの学系に属し、系列を越えて様々な科目を選択することが可能です。

4番目は、ごく普通の学校でのキャリア教育型です。このタイプは、主に、HRやLHRの時間の進路指導という枠組みの中で、キャリア教育や行事を組み込んでいくというシステムをとって

ます。

最後は、いろいろなものをミックスしたタイプです。名大附属はこのタイプにあてはまるのではないのでしょうか。

以上、五つの形態を列挙しましたが、2002・3年度からは、すべての中学・高校で、順次、「総合的学習」というものが入ってきます。この学習の中では、キャリア教育あるいは進路選択教育に取り組むことが非常に重視されており、その効果が期待されています。

4. 選択型キャリアパスウェイ：普通科型総合学科のキャリア教育：系列

それでは、具体的に、総合学科のキャリア教育はどのようなしくみになっているかを見ていきましょう。ここでは、普通科型総合学科の例として、比較的進学校である広島県の尾道北高校を取り上げたいと思います。総合学科を設置している学校は平成12年度で145校ありますが、その形態は実に多様で、その数だけのパターンがあると考えていいほどです。そのような中に、大阪の今宮高校や宮城県の宮城野高校、あるいは今回取り上げます尾道北高校のように、普通科だけで総合学校に改組した学校があります。

詳しいことは省略しますが、だいたいどの学校でも、教科・内容に関わる知識（知能）と、方法知に関するもの（例：産業社会と人間／課題研究）の習得を、キャリア教育の構想として定めています。尾道北高校の場合、全体として、育成すべき資質・能力というものがあり、その下に方法知・内容知を進化させる為の三つの柱（自主的活動・各教科、科目・原則履修科目）があります。そして、狭い意味でのキャリア教育はHRや自主的活動、原則履修科目で取り組み、広い意味でのキャリア教育は各教科、科目全体にわたって展開していきます。このような系列のシステムをとることにより、生徒は一定の将来の進路に対応する科目、教科をグルーピングすることが出来るのです。この高校では全部で、社会情報・ヒューマンサイエンス・国際文化・グローバルサイエンス・理数情報・生命科学の6つの系列、すなわちキャリアパスウェイを置いていて、その内容は多くの種類に富んでいます。そして、これらの系列の中には普通科高校でありながら、商業的科目があったり、農業的科目があったり、工業が関連したりして、なかなか専門的です。

このように、尾道北高校では系列、つまりキャリアパスウェイが六つ作られていましたが、総合学科が設置されたときの初等・中等教育局長通知には全部で13種類の系列が例示されています。例えば、情報関係、伝統技術、工業管理、流通管理、国際協力、地域振興、海洋資源、生物資源などといったものです。しかし、このように13系列だけに限定してしまうと各学校の対象をかなり絞ってしまうので、最終的には、現時点で22系列ぐらいが提示されるようになりました。これからも、生徒や地域の事情に応じて、キャリアパスウェイとしての系列を設定していけばいいのではないかと思います。

次に、目玉科目である「産業社会と人間」について話をしていきたいと思います。この科目は、進路指導関係者、ならびにキャリアガイダンス関係者が特に注目しており、職業と生活、産業の発展、社会の変化、進路と自己実現などといった様々な内容で構成されています。具体的にはライフプラン・科目選択の指導、適性テストの実施、外部講師の講話、見学・調査活動、現場実習・体験、見学・実習の記録、発表会などを通して、ソーシャルスキルを養っていくことになります。これが

標準内容ですが、実は二つの問題があります。まずは、スケジュールが非常に過密であることです。前期週2時間の中で外部講師をよんだり、進路選択科目の選択をしたり、外にも調査に出かけたりすることは、本当に消化するだけで大変です。次に、一度こういった系列を標準的なものとして定めてしまうと、どの学校も横並びに同じようなことをやってしまって、自分の頭で考えなくなることが挙げられます。そうならないようにすることが、これからの課題になるでしょう。

尾道北高校でも、「産業社会と人間」の科目の中で、様々な授業を試みています。その中でも、キャリア研修という形で大学を訪問して、いろいろ話を聞いたり調べたりする授業があります。ここでは、様々な学部を訪問します。例えば、同じ広島大学でも、医学部と総合科学部に行ったり、広島市立大学の芸術学部も訪問したりします。そこで生徒は、同じ医学臨床系であっても、総合科学部でやることと医学部でやることは違うということを学ぶわけです。このように、実際の学校現場に出かけることを通して、生徒は自分の進路を真正面に考えることになります。ここが、総合学科の積極的な面といえるでしょう。

実際、総合学科や課題研究などといったものに対して、生徒は非常に肯定的です。特に、このような授業に実際に取り組んだ生徒や卒業生に至っては、非常に肯定的です。これに対して教師の評価は、その取り組みの忙しさにより、少し低くなっています。総合学科の教育を肯定的に見ている教師は6割程度です。しかし、キャリア教育という観点から、総合学科の取り組みを始めたことにより、生徒が変わっていくのを目のあたりにしていますので、大変ではあるけれども、こうした授業は意味があるのではないかとおおむね肯定的に捉えているようです。

5. 普通科総合選択制高校のキャリア教育：総合学習としての「課題研究」

次に、普通科総合選択制高校のキャリア教育について話していきたいと思います。ここには名大附属が取り組まれたような教科コース型の総合的学習がありますし、総合学科が取り組まれているようなキャリア教育的な総合学習もありますが、今回は、六甲アイランド高校の課題研究について取り上げたいと思います。これは、『キャリアガイダンス』という雑誌に掲載されていたものです。

この学校では総合学科のように系列はなく、代わりに七つの学系というものがあり、進路に対応しています。総合選択制が総合学科と決定的に違うのは、総合学科の場合、高校必須科目の35単位を除けばすべて選択制であるのに対し、総合選択制では、共通履修に加えて学系の必修科目があって、それ以外が自由選択科目として位置付けられている点です。

つまり学系とは、弾力的なキャリアパスウェイであり、生徒はこの学系という枠組みの中で、科目を選択します。しかも時間割の都合上、同じ時間帯に10種類ぐらいの授業を行わざるを得ないので、生徒は一つの学系に偏ることなく、必然的に多系列の科目をとることになります。一般に、生徒は何か一つの中核になる自分なりのキャリア・進路みたいなものを持っていて、他学系の教科をとりつつも、その核に関する科目を集中的に学習する形態をとっています。しかし、中には様々な学系の科目を選択し、低い山がたくさん並んでいるような形態をとる生徒もいます。

六甲アイランド高校の場合、総合学科と同じように、「産業社会と人間」が1年次にあり、2年次に「情報技術」、そして3年次に「課題研究」を行うしくみになっています。しかし、これでは2年次でキャリアガイダンス、あるいはキャリア教育的なものがとぎれてしまうわけです。そこで、

それを未然に防ぐ為に、産業社会と卒業時の課題研究をつなぐ科目として「神戸学」というものが位置付けられました。これが非常にユニークな特色であるのではないかと思います。

6. 普通科・HR進路指導型キャリア教育の実践：体験学習の重視

時間も差し迫ってきましたので、急いで話を進めたいと思います。ここでの話は、ごく平均的なパターンキャリア教育の実践についてですが、非常に進んだ、系統的に取り組みされている学校の事例ですので、二つだけ紹介したいと思います。

一つ目は、進学校である福岡城南高校の取り組みについてです。この高校の特徴は、進学志向のキャリア学習を目指しながらその一方で、体験学習を重視しているところです。生徒は1年次にライフプランニングを行い、自己理解をします。次に、10年後、20年後の自分を目標付けて、2年次に啓発的な体験をし、3年次で進路を実現させます。このような授業が、城南高校では「ドリカム(dream come)時間」という名前で設定されており、LHRに2時間、補習として3時間、さらに放課後や夏休みの期間に設けられて、3年間を通して取り組んでいます。

二つ目は、やや多様な進路傾向をとる場合の普通科の例として、小樽明峰高校を取り上げました。ここでは、今、キャリア教育の一つの有力な方法として位置付けられているインターンシップを徹底的に行っていることが最大の特徴です。大学進学を希望する生徒も多い中、この学校では現場体験というものを、あえて職業体験型の学習として位置付けています。これは、小樽が今や札幌の後背地となり、地域振興というものが非常に求められるようになったという特有の事情が背景にあったからではないかと思います。

この学校で生徒は、1年間を通してそれぞれの事業所でインターンシップを行います。先生方は、このような受け入れ先を開拓するだけでも大変なのですが、それに加えて、非常に丁寧な報告書を生徒に作らせることにも取り組んでいます。平成11年度では、合計21業種145の事業所が、1ヶ所につきおよそ1人から2人という体制で、生徒を1年間、継続的に受け入れています。このような体制をとっていると、職業とのつながりというものが高くなると思うのですが、別に就職者の為だけにやっているわけではなく、職業に対して、より一般的な位置付けがなされていきます。

最後に、これは私の研究の宣伝も兼ねまして、アメリカとは違う、もう一つの源流であるドイツのインターンシップについて紹介したいと思います。

ドイツでは、日本でいうインターンシップを「実習」という言葉で表現し、中学校段階から大学に至るまで、すべてのところでこの「実習」に取り組んでいます。そして、この現場体験教育は徹底的に行われています。ドイツには全部で16の州があり、それぞれ全く違った教育システムをとっています。しかし、どの州でもギムナジウムを除き、ほぼ同じ形で現場体験を位置付けています。ギムナジウムとは、大学入学資格につながる普通高校のことを指すのですが、3割程度の生徒しかそこには行きません。また、ギムナジウム生も、ギムナジウムに入る前に10年間の義務教育期間があるので、そこで現場体験をする機会が設けられています。また、中には大学入学資格を習得した後に、就職コースに入る人もいますし、最近、特に大都市では職にありつけないという事情があることから、現場体験型コースに入る青年も増えてきています。

それでは、企業実習と総称していますが、実際はどのように展開しているのかを見ていきましょ

う。例えば、プレーメンの中等学校では、最初に体験・準備という段階、次に実際に実習に参加する段階、最後にそれを評価する段階と、三つのステップを踏んでいます。そして、特に三つ目の評価する段階というものを、非常に重視しています。

企業実習とは、受ける側からしますとその期間の間、仕事に打ち込まなくてはいけないというイメージを持ってしまいがちなのですが、その生産ラインに入れられることは殆どありません。第一、実習の期間が2、3週間ととても短いので、現場の人たちと同じように仕事をこなすことは不可能です。その代わりに何をやっているのかといいますと、現場の専門家に一日間生徒がついていって、どのような仕事をしているのかを調べたり（ジョブ・シャドウ）、これはこの附属でもいろいろ取り組まれたかと思いますが、いろいろな職業や進路に関する情報を提供している地域の施設に出かけていって予備調査をしたり、実習の後の報告書を詳細に書いたりしています。このような流れでドイツでは企業実習が行われています。

7. 重要な問題

これまで、内外の中等学校、高等学校のキャリア教育を構成すると思われるいくつかの実践を紹介してきましたが、最後に、それぞれの学校でキャリア教育に取り組む場合、どういうことを最低考えればいいかを四点ほど、問題提起という形で考えてみました。

まず、一つ目は、キャリア教育というものに対してどういう目標を設定するかということです。これは基本的な問題ですが、進学志向でいくのか就職志向でいくのか、あるいは総合学科の平均的なパターンのように多様な進路を保証していくのか、その方向性をしっかり決める必要があると思います。それによって、学校で用意するシステムも科目も随分違ってくることでしょう。

二つ目は、進学志向的に高等教育との接続を重視する場合、どのように高等教育あるいはその後のキャリアを見こしたキャリアパスを設定していくのかということです。このことにつきましては、我々はどうしても現在の教員スタッフの中だけで考えてしまいがちです。スタッフがいない分野についてはどうすればいいのかという問題がでできます。現在、学校間連携を考えてみたり、外部講師を補ったりすることが提案されていますが、付近に適当な学校・学科があるのかどうかといった問題を含めて検討する必要があります。

三つ目は、キャリア教育という場合、どのように方法知、生き方全般を生徒たちに教えていくかということです。実際に、子供たちに自分たちの進路を選択する能力を身に付けさせていくことになりますと、様々な方法知だけでなく、進路を選んだり考えたりする、基礎的な情報や技を伝えることがどうしても必要になってきます。ただ、生き方学習をやっただけで、後に何も残らなかったということがないように、バランスよく考えていくことが重要なのではないのでしょうか？

最後は、体験学習をどう取り組むかということです。先ほどもドイツの例を挙げて紹介しましたが、調査・学習段階、訪問調査・見学の段階、企業実習の段階、さらに最後の評価の段階のそれぞれを、しっかり抑えていく必要があるのだとおもいます。ただ、現場に出かけるだけではないような、積極的な体験学習を行っていくことが求められていると思います。

以上、私の見聞きする範囲の中で、キャリア教育について出来るだけ具体的に話をさせていただきました。